

第一章 路頭に迷った夜

ソウルの冬の夜風は、肌を容赦なく切り裂くように冷たかった。

キム・ハウンは、駅前のベンチにうずくまり、薄いコートの襟を握りしめていた。一〇歳になったばかりの彼女の手には、破れた受験票と、大学不合格通知書が握りつぶされていた。

「ソウル大も延世も高麗も……全部落ちた」

受験戦争に敗れた。親からの仕送りは止まり、下宿の鍵も返却した。財布の中には、千円札が二枚と小銭が少しだけ。明日のご飯さえどうなるかわからない。

「……どうすればいいの」

涙がこぼれそうになったとき、遠くから明るい光と、女性の笑い声が聞こえてきた。

駅の裏通り、ネオンが派手に点滅するビルの入口に、若い女の子たちが集まっていた。短いスカート、胸元が大きく開いたトップス、キラキラしたアクセサリー。彼女たちの体は、夜の街に浮かぶように艶やかだった。

一人の少し年上の女性が、ハウンを見て足を止めた。

「ねえ、あんた。そんな格好で何してんの？ 寒そう」

ハウンは反射的に顔を上げた。相手は化粧が濃く、胸の谷間が深く見えるブラウスを着ていた。目が笑っているのに、どこか計算高い光を宿している。

「……受験に落ちて、行くところがなくて」

「ああ、落ちこぼれね」と女性はあっさり言った。「私、スンジョン。K O A L A C L A S S というグループの司会や
つてる。あんた、顔はいいし、体も細くて可愛い。興味ある？」

「……何の？」

スンジョンは近づき、ハウンの顎を軽く摘まんだ。冷たい指先が、まだ幼さを残す肌に触れる。

「ダンスだよ。セクシーなやつ。視聴者がお金をくれる。上位に入れば、一夜で何十万も稼げる。あんたみたいな行き場
のない子、うちにはたくさんいる」

ハウンの心臓が跳ねた。

「……本当に？」

「試してみる？　今夜、練習がある。来てみない？」

ハウンは、凍えた体と空っぽの財布を思った。受験に失敗した自分が、もう一度「勝つ」ための場所が、そこにあるのか
もしれない。

彼女は小さく頷いた。

練習スタジオは、駅から歩いて十分ほどの地下にあった。

ドアを開けると、熱気と香水の匂いが押し寄せた。十人以上の若い女性たちが、鏡の前で体を動かしている。ほとんどが
短いホットパンツに、ブラのような薄いトップス。胸の谷間がはっきり見え、腰をくねらせるたびに布がずれ、白い肌が
覗く。

「今日の新人が来たよ」とスンジョンが声を上げた。

全員の視線がハウンに集まった。好奇と、少しの敵意が混じっている。

「ハウン。一〇歳。受験落ち。今日からうちの練習に参加する」

「へえ、処女っぽい顔してる」

「胸、小さそう」

「でも腰のラインは悪くないわね」

誰かが笑った。

スンジョンはハウンに、スタジオの隅に置いてあった衣装を投げた。黒のレースのブラジャーと、股下が極端に短いホットパンツ。布の量は、下着とほとんど変わらない。

「着替えて。今すぐ」

ハウンは顔を赤らめた。周囲の女の子たちは、すでに似たような格好で普通に動いている。彼女は仕方なく、壁際で服を脱いだ。寒いスタジオの空気が、むき出しの肌に触れる。ブラジャーを付けると、自分の胸が意外に豊かに押し上げられ、谷間が深く刻まれた。ホットパンツを履くと、尻の形がはっきりと浮き出る。

鏡に映った自分を見て、息を飲んだ。

「いいわよ。意外と色っぽい」スンジョンが後ろから近づき、ハウンの腰に手を回した。「これから、あんたはこの体で稼ぐの。視聴者は、きれいな顔だけじゃ満足しない。胸を揺らし、尻を振り、必死な顔を見せる子が、一番お金をもらえる」

音楽が大音量で流れた。

「まずは基本の腰振り。こうやって、股間を前に突き出すように」

スンジョンがハウンの腰を掴み、強制的に動かした。ハウンの尻が前後に揺れ、薄い布越しに股の形が強調される。胸が上下に弾むたびに、レースの隙間から肌が覗く。

「もっと低く。膝を曲げて。そう、いい……」

他のメンバーたちも加わり、輪になってハウンを囲んだ。誰かが後ろから胸に手を伸ばし、軽く揉んだ。

「柔らかいわね。もっと大きく見せたいなら、こうやって寄せるの」

別の子がハウンの手を取り、自分の胸に押し当てた。熱い感触が掌に広がる。ハウンは息を荒げ、脚が震え始めた。

「受験戦争に負けた子が、ここで勝つにはね」スンジョンが耳元で囁いた。「体売る覚悟が必要なの。今夜はまだ練習だけ。でも来週から本番。あんたの胸と腰と、必死な顔を、何千人もの男が見るわ」

ハウンの股間が、熱く湿ってきた。

自分でもわからない。恥ずかしさと、興奮と、生きるための必死さが、混ざり合っていた。

鏡に映る自分の姿を見た。

レースの隙間から覗く白い胸。揺れ動く尻。紅潮した顔。

「……やります」

ハウンは、震える声で言った。

受験に落ちた少女は、この夜、別の戦場に足を踏み入れた。

第2章 初ステージ

一週間後。

ハウンは、ステージ袖で息を殺していた。

黒いレースのボディースーツは、股間の部分が極端に薄く、布が肌に密着して陰部の形をはっきりと浮き出させている。胸の部分は大きく開き、谷間が深く切れ込み、少し動くだけで乳首の先端が布の縁に擦れた。腰には細いチェーンが巻かれ、歩いたたびに金属音が小さく鳴る。

「緊張してる？」スンジョンが隣でタバコを吸っていた。「初ステージでビクビクしてる新人は、視聴者にすぐバレる。必死な顔を見せろ。男はそれが大好きなんだから」

控室のモニターには、すでに先行メンバーの映像が映っていた。セジが腰をくねらせ、両手で自分の胸を寄せ上げ、乳肉を揺さぶっている。ホットパンツの布が股に食い込み、陰唇の割れ目がくっきりと浮かび上がっていた。チャット欄には「もっと擦れ」「乳首出せ」「寄付するから脱がせろ」という文字が高速で流れていく。

ハウンの心臓が耳の奥で鳴った。

「次、ハウン。行け」

ステージに出た瞬間、白いライトが全身を照らした。数百人の視聴者の視線が、画面越しに彼女の体を舐めるように這うのがわかった。

音楽が始まった。重いベースが腹に響く。

ハウンは覚えた振り付け通りに腰を落とした。膝を大きく開き、股間を前に突き出す。薄い布が陰部に強く食い込み、クリトリスが布の裏側で擦れた。熱い感触が下半身に広がる。胸を上下に揺らしながら、両手で乳肉を内側に寄せた。谷間がさらに深くなり、汗で湿った肌がライトに光る。

「……はあっ、はあっ」

息が荒くなる。腰を左右に振り、尻を大きくくねらせるたびに、ボディースーツの布が股の割れ目に沿って食い込み、陰唇が左右に押し広げられる感覚があった。自分の愛液がすでに布を湿らせ始めているのがわかった。チャットが爆発した。

「新人かわいい」

「胸小さいけど揺れ方がいい」

「股間濡れてるのバレてるぞ」

「もっと低くしゃがめ」

ハウンは指示通りに、膝を限界まで曲げてしゃがみ込んだ。開脚した股間をカメラに向け、腰を前後に突き出す。布が陰部に密着し、クリトリスが直接擦れる。快感が背筋を駆け上がり、思わず声が漏れた。

「んっ……あっ……」

スンジョンがサイドからマイクで煽った。

「ハウン、もっとやれ。視聴者はお前の濡れた股間を見てるんだぞ。寄付が止まっている。必死にアピールしろ」

ハウンは立ち上がり、両手で自分の胸を鷲掴みにした。乳肉を強く揉み、指で乳首の上から摘まむ。布越しでも硬くなった

た突起が指に引っかかった。腰を激しく振り、尻をカメラに突き出す。布が尻の割れ目に深く食い込み、肛門の周りまで肌が露出する。

「見て……ください……」彼女は震える声で囁いた。「私の……ここ……全部……」

愛液が太ももを伝い始めた。ボディースーツの股布は完全に濡れ、暗い染みが広がっている。ハウンは指を股間に伸ばし、布の上から自分の割れ目をなぞった。クリトリスを円を描くように擦り、指の腹で陰唇を押し広げる仕草をした。

「あっ……んっ、気持ちいい……」

嘘ではなかった。恥ずかしさと興奮が混ざり、下半身が熱く疼いていた。視聴者の視線が自分の最も卑猥な部分を舐め回していると思うと、体が勝手に熱を帯びる。

一人のメンバーが近づき、後ろからハウンの腰を掴んだ。彼女の手を取り、自分の胸に押し当てる。

「こうやって、もっと見せつけろ」

ハウンの手が他人の柔らかい乳肉に沈んだ。指が深く埋まり、熱い感触が掌に広がる。相手もハウンの胸に手を伸ばし、布をずらして白い肌を露出させた。乳首が冷たい空気に触れ、すぐに硬く尖った。

二人で腰を合わせ、股間を擦り合わせるように踊った。濡れた布同士が擦れ、水音に近い音が小さく響く。ハウンの愛液が相手の太もにも移った。

チャットはさらに過熱した。

「いいぞ、もっと擦れ」

「寄付した、乳首摘ませろ」

「この子、本気で濡れてる」

ハウンはもう我慢できなかった。指を自分の股布の中に滑り込ませ、直接陰唇に触れた。ぬるぬるとした愛液が指を包み、クリトリスを強く擦る。腰が勝手に痙攣し、甘い声がマイクに乗った。

「あっ……あっ、だめ……出そう……」

スンジョンが低く笑った。

「出せ。視聴者の前で、お前の初めてのイキ顔を見せろ」

ハウンは膝を震わせながら、指を激しく動かした。クリトリスを爪先で弾き、中指を入り口に浅く沈める。内壁が収縮し、大量の愛液が溢れ出した。体が弓なりに反り、白いライトの下で絶頂が訪れた。

「いっ……くううっ……！」

脚が震え、愛液がホットパンツの端から滴り落ちた。ステージの床に小さな水溜まりができる。ハウンは荒い息をつきながら、カメラを見つめた。紅潮した顔、乱れた髪、濡れた股間。すべてが晒されていた。

モニターに、寄付の通知が次々と表示された。

「ハウンに二〇万ハート」

「新人初ステージ記念で50万」

「また出せ、もっと見せろ」

スンジョンが近づき、ハウンの耳元で囁いた。

「よくやった。これが、お前の新しい戦場だ」

ハウンはまだ痙攣する下半身を押さえながら、ゆっくりと立ち上がった。鏡に映る自分の姿を見た。体は汗と愛液で光り、胸は激しく上下している。

受験に落ちた少女は、今夜、初めて「勝った」感覚を味わっていた。

そして、もっと深く、もっと卑猥に堕ちていくことを、すでに予感していた。